

伊藤 元重

## あふれ返る悲観的な評論

昔どこかで聞いた話だが、景気は「気」の問題であるという。つまり、人々の気分の状況によって景気は良くも悪くもなりうるということだ。今の日本の景気の状態を見ると、この気の問題が非常に大きいように思える。

ある大手の日用品メーカーの話だが、昨年2009年の業績は、「減収増益」であるという。日本国内の

売り上げがはかばかしくなく売り上げは下がってしまったが、アジアでの利益が大きく伸びたので利益は増えているという。アジアへの輸出などを中心に経済には明るい兆しがあるのに、日本国民が全体として悲観的な気分であるので国内での売り上げが振るわないということのよう

だ。このメーカーの社長が言っていたが、問屋や小売店が将来に対して悲観的な見通しを持っていて、仕入れ

額を減らすような動きが出ているという。それが景気をさらに悪いものにしていく。人々の気分を変えない限り、なかなか日本の景気は良くならないようである。

困ったことに、このような不安な時代には、人々の不安をかき立てることを商売にするような人が出てく

## 「気」が左右する日本の景気

ることだ。ある評論家が言っていたが、人々の前で話をするときには、できるだけ悲観的な話をした方がよいという。「今年の景気は大変なことになる。大きな二番底だろう」と

言えば、聴衆は緊張して聴いてくれる。ただし半信半疑だ。もしその予想が当たって景気が本当に悪くなれば、その人の評価は上がる。予想が外れて景気が良くなればどうだろうか。たぶんだれもそんな悲観的な話は忘れてしまっただろう。あるいは、「あの厳しい予想が外れて良かった」と

と見逃してくれるだろう。

すべての評論家がそうした不届きな意図をもって予想をしているとは思わないが、書店に並んでいる経済書や週刊誌の記事の見出しなどを見ると、明日にも日本は破滅しそうな

書籍や記事であふれ返っている。「二番底がやってくる」「財政破綻（はたん）の後は狂乱物価だ」「円50円時代で日本は大変」「株価は7千円を切るだろう」といったたぐいのタイトルだ。

こんな書籍や雑誌のタイトルを毎日のようにこれでもかこれでもかと思せられていたら、本当に気分から景気が悪くなってしまう。健康な人に「病気だ、病気だ」とささやきつけていたら本当に病気になってしまうのと似ている。

### 意志の力で未来切り開け

フランスの有名な作家のアランがどこかに次のような文章を書いている。「悲観は感情から出てくるものだが、楽観は意志が作り出すもの

である」と。感情に流されて悲観的になって嘆いてばかりいるのではなく、意志の力で明るい未来を切り開いていくべきだということのような意味だと解釈している。

日本の経済や景気についても同じことが言えるのではないだろうか。景気はどうだろうかと周りの話を聞きかじり、暗い話ばかり聞いて悲観的になるようでは、景気はいつまでたっても良くなる。日本の今の状況で自分たちの未来を明るくするために自分は何ができるのか、国民の一人一人が真剣に考える時代なのだ。企業経営者であれば、どうしたら自分の会社の業績を良くできるのかを考えるべきなのだ。他人任せの景気談議ではなく、自分の意志の力で運気を引き寄せてくる気概が必要な時代である。

司馬遼太郎氏の「坂の上の雲」などでは、かつての日本にはそうした自助の精神、未来への楽観論があったように見える。日本人がこれほど政府や他人への依存を強くしてしまったのはいつのころからだろうか。

（総合研究開発機構  
理事長・東大教授）

\*この記事は静岡新聞社編集局調査部の許諾を得て転載しています。